**2010年2学期地域基礎I　確認ミニレポート課題**

それぞれ400-600字程度にまとめ1枚のA4判用紙（両面可）で提出。コピベ厳禁（判明した場合は大幅に減点します）。

4. 日本軍政期から独立まで　福村　健

 5. スカルノ政権下のインドネシア　芳原　俊忠

 6. スハルト政権下のインドネシア　植田　章友

4.　憲法草案の冒頭部分にはもともと「イスラムを信奉する者には、イスラム法の実践義務を伴う神への信仰」という字句がありました。しかし、「憲法の冒頭部分は、基本の更に基本であり、したがって例外なくすべてのインドネシア国民のためのものでなければならない。もしも、この基本の一部分であってもインドネシア国民の一部分―数の上では多数にせよ―を対象とするだけのものであれば、少数派はこれを差別と感じるはずだ。だから、もしこの差別的な要素を含む冒頭部分をそのまま生かすことになると、○○○○○○のグループは共和国の外で自立を希望する」おそれがでてきました。そのため、1945年8月18日、憲法公布の日の朝、憲法が正式に公布される前に予備会談が開かれ、憲法冒頭の「○○○○○○の心を傷つける文言を削除し、『唯一の全能なる神への信仰』と代えることで合意」が確認されました。以上は、初代の副大統領になったモハマッド・ハッタの回想録に記録されている内容です。文中の○○○○に該当する少数派のグループとはどのようなグループでしょうか？また、地理的にはどの地域に分布しているでしょうか？

2.　インドネシアの最初の憲法は1945年8月18日に公布されました。この憲法は日本軍政期に準備されたものだったので、憲法としては不完全なものでした。その後、1950年に新しく憲法が制定されましたが、これも過渡的な性格でした。そこで、1955年に初めての総選挙によって国民の代表が選ばれると、理想的な新しい憲法を制定するための制憲会議が発足しました。しかし、制憲会議では議論が紛糾し、結論がでませんでした。そのため、1959年にスカルノ大統領は制憲会議を解散し、大統領の権限が強い1945年憲法への復帰を宣言しました。これがスカルノ大統領による独裁政治の始まりです。制憲会議で意見がまとまらず、新しい憲法を作ることができなかった最大の理由はなんであったかを簡潔に説明してください。

3.　スハルト大統領は、政権の汚職・癒着・縁故主義（インドネシア語でKKNと言う）に対する国民の批判が高まるなか、1998年に退陣しましたが、スハルト独裁政権が1970年代から１９８０年代にかけてインドネシアの経済開発を進めたことも確かです。経済開発の成果の一つは食糧自給の達成で、これによりスハルト大統領は1989年に国連から表彰されています。この食糧自給達成のカギとなったのが「緑の革命」です。緑の革命とはどのようなことなのか、また緑の革命が社会に及ぼした影響はどうだったのかを簡潔に説明してください。